

がんの痛みと作業療法

特集にあたって

生涯のうちに約2人に1人が、がんにかかると推計されている¹⁾現在、がんセンターや特定病院に限らず、一般病院、そして在宅に至るまで、広くOTはがんにかかわるようになってきた。3/4のがん患者が痛みを経験するとの報告²⁾があり、OTは、痛みについての理解を深め、作業療法を実施することが必要と思われる。

そこで今回、①がん性疼痛と治療の基礎的知識を得る、②がん性疼痛のアセスメントにかかわり、多職種との連携を図る、③身体の痛みだけでなく、トータルペインについての視点をもつ、④骨転移カンファレンスとOTの骨疼痛緩和治療症例を知る、⑤在宅リハにおけるがんの痛みに対する事例を知る、⑥死生学の立場から終末期の臨床で働くOTの心の痛みに対して示唆をいただく、これら6つの観点から本特集の執筆をいただいた。

がん患者のQOLを支えることができることは、OTの長所であると思う。場合によっては、最期の時期まで患者と家族のQOLにかかわることができる職種である。身体機能やADLの維持改善を目的とする時期に支援することはもちろん、身体機能やADLが低下する状態にあっても、その人の人生に寄り添う作業療法を提供することができる。がんの痛みへの対応とともに、本特集が作業療法によるQOL向上についても、再考するきっかけとなることを願っている。

文献

- 1) 厚生労働省：がん対策推進基本計画。(http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku02.pdf)
- 2) Twycross R, 他(著), 武田文和(監訳): トワイクロス先生のがん患者の症状マネジメント. 医学書院, 2003

(高田明子)

企画担当

高田 明子 (信州大学医学部附属病院, 作業療法士)

澤 俊二 (藤田保健衛生大学, 作業療法士)

山本 伸一 (山梨リハビリテーション病院, 作業療法士)